

「一人ひとりを大切に」

高松市立屋島西小学校 6年 ^{やまだ}山田 ^{まりの}穂乃さん

「お父さんが今の穂と同じころに読んだ本だよ。読んでみてごらん。」と、夏休みに父が勧めてくれたのが、カフカの「変身」でした。当時父は、この本の意味が分からなかったそうです。私は父の言葉に興味を覚え、読んでみることにしました。

内容は、朝起きたら大きな虫に変身しているという、衝撃的な出だしでした。誰にも理解してもらえない主人公のつらさや寂しさを思うと、暗く悲しい気持ちにさせられました。作者は、普通の人とは違う外見を虫という極端な姿にまとめ、外見によって差別や偏見を行う人間を不気味に描くことで、何かを伝えようとしているのではないかと感じました。

人を外見で判断してはいけないことは知っています。しかし、初めて黒人を見た時には驚き、意味もなく怖いと感じてしまいました。金髪で青い目の白人を見ると、自分もそうなりたいと思いました。でも、そんな人に「あなたの真っ黒な目と髪がキレイ。」と言われて自分に自信が持てました。肌の色による差別は、お互いの違いを知ることが、解決への一歩になるのではないかと思います。

人を外見で判断してはいけないことは知っています。しかし、初めて手や足を失った人を見た時には驚き、思わず目をそらしてしまいました。でも、パラリンピックで活躍しているアスリートの晴れやかな笑顔を見ると、

障害による外見の違いなんて、大した問題ではないと思えるようになり、目をそらしてしまった自分を恥じる気持ちが生れました。

ところで、主人公は本当に虫の姿になったのでしょうか。もしかすると、主人公の心が変化したことで、周囲からは異様なものに見えてしまったのかもしれない。

人を外見で判断してはいけないことは知っています。介護老人ホームに入居した祖父の外見は変わりませんでした。しかし、体の内側は少しずつ変わっていきました。だんだん話が通じなくなり、私たちの顔も忘れていっているようでした。私は、親戚の人が祖父に会いに来ると聞くと、少しいやな気分になっていました。祖父を恥ずかしいと思う気持ちがあったからです。でも、家族が以前と変わらず接している姿を見て、私の中に変化が起きました。どんな姿になっても、大好きな祖父に違いないということを改めて感じました。

主人公は虫に変身してしまいましたが、人間の心は持ち続けていました。でも、言葉は理解してもらえず、家族からも見放され、失意のうちに死んでしまいます。周囲の人が、姿は変わっても人間として接することができていたら、主人公は人間に戻れていたかもしれません。外見が違っていても同じでも、相手を大切に思いながら接していかなければならないと改めて思いました。まずは自分を大切にし、家族や友達、そして周りの人へこの気持ちを広げていきたいと強く思っています。